

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-420	21-020	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
題名 (原題/訳)		
Unbiased, comprehensive analysis of Japanese health checkup data reveals a protective effect of light to moderate alcohol consumption on lung function 軽度～中等度のアルコール摂取は肺機能に保護的である－日本の健康診断データの偏りない包括的な分析より－		
執筆者		
Makino K, Shimizu-Hirota R, Goda N, Hashimoto M, Kawada I, Kashiwagi K, Hirota Y, Itoh H, Jinzaki M, Iwao Y, Ko M, Ko S, Takaishi H.		
掲載誌		
Nature Scientific reports, 2021,11:15954. doi: 10.1038/s41598-021-95515-4		
キーワード		PMID
アルコール摂取、肺機能、加齢、日本人、健康診断		34354190
要 旨		
<p>目的: 飲酒などの生活習慣が健康全般に及ぼす影響については、依然として議論の余地がある。本研究では、日本人の健康診断データを用い、数学的アプローチによる包括かつ偏りのない解析により、アルコール摂取が加齢に伴う変化に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。</p> <p>方法: 2018年に慶應義塾大学病院で健康診断を受けた6036人を横断分析の対象とした。そのうち2013年にも健康診断を受けており、肺機能データ（肺活量、1秒量）が記録されている1765人を縦断分析の対象とした。健康診断は、標準的な質問票、身体検査、生化学検査、腹部超音波検査、胸部CTスキャンを含み、胸部CTスキャンから肺容積を測定した。自己記入による1日あたりの飲酒量と頻度を組み合わせて、1週間あたりの総飲酒量を算出した。飲酒量と肺機能との関連について、横断分析では、ANOVA、相関分析および独自のプログラムによるPCITを用い、縦断分析では相関係数を算出し、$P < 0.05$で、$R > 0.05$の絶対値を統計的に有意とした。</p> <p>結果: 横断分析の結果、総飲酒量と肺機能（肺活量: $R=0.35$、1秒量: $R=0.30$）との間に有意な正の相関を認めた。縦断分析の結果、5年間の総飲酒量が増加するほど、肺活量の経時的減少は減弱した（$P=0.0058$）、ベースラインのアルコール摂取量が多いほど、5年後の肺活量と1秒量が維持されていた。男女別にみると、男性においてのみ、総飲酒量と肺活量との間の有意な正相関（$R=0.16$）を認め、5年間の総飲酒量の変化と肺活量の変化との間の正相関（$P=0.019$）および1秒率比の変化との負の相関（$P=0.0086$）を認めた。一方、飲酒量の変化は肺容量の変化と関連しなかった。また、潜在的な交絡因子である喫煙の影響を除いても、飲酒量と肺機能との関連は同様であった。さらに、飲酒頻度よりも1回の飲酒量の方が肺機能との関連が強かった。</p> <p>結論: 男性において、適度な飲酒は、喫煙の影響を除いても、肺機能の経時的な低下に対し保護的に影響する可能性があるかもしれない。</p>		